関西自然保護機構会報 14(2)：63－64, 1993

巻頭言

街路樹の剪定に思う

渡辺弘之
（京都大学農学部）

10月に入った。初雪はもう白山まで来たようだ。京都の街路樹もこころなしか輝きが消えたが，紅葉と呼ぶにはまだ早すぎる。ところが，もうプラタナスなど街路樹の剪定が始まった。作業はあっというまのこと，夕方にはすっかり冬の装いに変わっている。剪定された街路樹のさまが秋の風物詩として，紙面を飾ることになる。市街地では街路樹の紅葉を愛でることもかなわないのである。

確かに，この剪定の技術はすばらしい。わが国独特のものであろう。外国からこの剪定を学びにくるそうだが，京都の有名社寺の庭園樹木や家庭の庭木の剪定をみても，それが長い伝統に培われた技術，日本文化の誇りうるものの一つだとは，私でも感ずる。

しかし，すばらしいとはいえ，街路樹にここまで完璧な剪定が要求されるのだろうか。この剪定が本当に都市景観にマッチしているのだろうか。もう少し枝を残したら何か不都合が生じるのだろうか。ドバトが巣をつくること，スズメがお宿にすることくらい許してやってもいいような気がする。

剪定をするのは，冬になれば葉は落ちるのだから，信号が見にくいからという理由はない。やはり落葉が問題なのであろう。確かに，あれだけの葉が落ちるのだから，アスファルトの上ではすぐには腐らず，始末の悪いごみとして漂い，排水溝・下水を詰まらせることになるのだろう。

どのくらいかかっているのか知らないが，毎年あれだけきれいに剪定するのだから，経費も，京都市だけでも相当な額になるはずだ。といっても，ごみ処理費，あるいは，ぬれ落葉での自動車のスリップ事故などを考えたら，全街路樹を一斉に剪定してしまう方が経済的には有利ということになるのであろう。剪定は葉が落ちてからでは遅い。いきおい，落ちるまえに全部を剪定してしまうのだから，地域によっては，もったいないほどの緑を保っているのに，剪定が始まるということになるのだろう。

そんなことを素人なりに理解すると，文句のつけようはないのだが，庭園樹木の剪定技術の街路樹への応用にとまどいを感じるのは私だけであろうか。この剪定された樹形が本当に都市景観・風致の分野でも評価されているのだろうか。

街路樹の根元までアスファルトで固めるというのはさすがに少なくなり，根のまわりに土をだし，鉄のすのこをはめるといったことが進められているが，さらにもう少し広くあけ，ここに落葉をおいて自然に腐らせてもいいのではないだろうか。土の上なら落葉だってそういつまでも残ってはいないはずだ。街路樹の肥料にもなる。

もう一つ気になっていることは，あれだけの大量の枝と葉，切り落とされたあと，どこへ運ばれているのだろう。どこかに積まれ堆肥にでもなっているのか，それとも家庭ごみにまぜられ，燃料のかわりをしているのだろうか。枝も葉も，もう一度自然に返してやりたい気がする。

あきびんやあきかんが落ちているのはマナーの問題だが，歩道に落葉が落ちていてもいいし，落葉をサクサク踏みしめながら歩いてもいいように思える。ずっと以前だが，初冬のパリを訪れたと

き，歩道にたくさんのマロニエの葉が落ちていて，そのときは“汚い街”と思ったのだが，最近になると，あれでいいのだと，日本の潔癖さの方が気になってきた。

街路樹の根元まできれいにアスファルトで覆い，落ちるまえに剪定し，一枚の葉をも地面に落とさないなど，少し世の中，潔癖になりすぎていないだろうか。地価が高く歩道を広くとれないといったことが，最大のネックだろうが，もう一つ，かたくなな完璧・潔癖性が背後にあるように思える。自然保護の問題には，すぐに人の暮らしが大事か，自然が大事かといった二者択一の論議がでてくる。

自然を理解する，自然保護を考えるのには，少し緩やかな感性・視点をも持つ必要があるのではなかろうか。街路樹の剪定をみて，こんな思いがした。